

日本のストーンサークル

文——伊東孝

Takashi Hobo ● 日本大学理工学部社会交通工学科 特任教授

写真——西山芳一

Hoichi Nishiyama ● 土木写真家

暫定世界遺産リスト「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」では、土木建築的に何があるだろうか。三内丸山遺跡の巨大六本柱は、誰でも思い浮かべるだろうが、北海道・北東北の縄文遺跡群に共通するものは何か？ 土木写真家の西山氏と悩みながら現地入りしたのが、今回の取材の旅である。到達した結論は、ストーンサークルであった。

ストーンサークルで有名なのは、イギリスにあるストーンヘンジだ。学生の頃、何かで知り、イギリスに行くたびに、時間があたら訪れてみたいと思っていたが、未だに果たせずにいる。こういうものは「時間があたら」という中途半端な気持ちではなく、「行く」という強い意志が働かないと行けないものだということが最近わかってきた。今回、北海道・北東北のストーンサークルを取材したおかげで、以前よりストーンヘンジが身近になった。



大湯環状列石の万座環状列石(秋田県鹿角市)

大湯環状列石は、万座と野中堂の二つの環状列石により構成されている。万座の直径が48m、野中堂が42mで、二つの環状列石は90m離れている。90mは、二つの直径を合計した値で、計画的とみなされている。周囲の復元建物は、儀式のための場所と考えられている。

さて、環状列石・環状石籬と訳されるストーンサークルは、巨石記念物の一種で、柱状または板状の石を環状に立て並べたものである。新石器時代から初期金属時代の祭祀・埋葬遺跡で、ヨーロッパやアジアに広く分布する。日本では北日本の縄文時代後期・晩期に多い(「広辞苑」)。ストーンヘンジも、同時代のものだ。

ヨーロッパやアジアに広く分布するとなると、日本のストーンサークルの個性や特徴はどこにあるのか。ひとつは「縄文」にある。縄文時代は、年代的には約一万六、五〇〇年前から約三、〇〇〇年前にかけて、日本列島で発展した文化であり、世界史では中石器時代ないし新石器時代に相当する。旧石器時代と縄文時代の違いは、土器の出現や竪穴住居の普及、貝塚の形式などにあるという。ついでに縄目模様を示す「縄文」名称の由来についても説明しておく。大森貝塚を発見したエドワード・S・モースが発掘した

三内丸山遺跡で推定復元された巨大六本柱(青森県青森市)
掘立柱の穴は、直径約二m、深さも約二m、中に直径一mのクリの柱が入っていた。穴と穴の間隔はすべて約四・二mで、整然と配列されていた。六本柱が何だったのかについては、決着がつかない。



土器をCord Marked Potteryと報告したことにはじまる。「縄文時代」に落ち着いたのは、戦後のことだ(Wikipedia)。

今回の取材で訪れたストーンサークルは四カ所。鶯ノ木遺跡(北海道森町)、小牧野遺跡(青森県青森市)、大湯環状列石(秋田県鹿角市)、伊勢堂岱遺跡(秋田県北秋田市)である。ここには三内丸山遺跡が含まれていない。しかし三内丸山遺跡にも実はストーンサークルはある。環状配石墓といわれる小さなストーンサークルで、直径は約四m。これに対し、上記四カ所のストーンサークルは大型で、直径三〇〜五〇mもある。以下では、説明の都合上、大きなストーンサークルを環状列石、小さなストーンサークルを環状配石として区別する。

三内丸山遺跡の環状配石墓は全国的にみて、もっとも古い時期のものといえ、環状配石と環状列石の関係は、次のように説明されている。当初、集落の中にあつた特定の人びと(長老?)の環状配石墓が、集落の外でつくられるようになり、大型化した。環状列石はひとつの集落ではつくれないので、周辺のいくつかの集落が集まって共同でつくり、共同管理・維持された施設と考えられている。

三内丸山遺跡の環状配石墓は、どのように配置されていたのか? 史跡の範囲内での発掘結果だが、道路跡が東西に四二〇m、南北に三七〇mあり、緩斜面の墓域が南北道路に沿っ



高速道路上に位置する
鷲ノ木遺跡ストーンサークル
(北海道森町)

鷲ノ木遺跡は、高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査で発見され、遺跡の下に箱型ルーフ工法でトンネルを掘削、現地保存した。石下に墓のないタイプ。



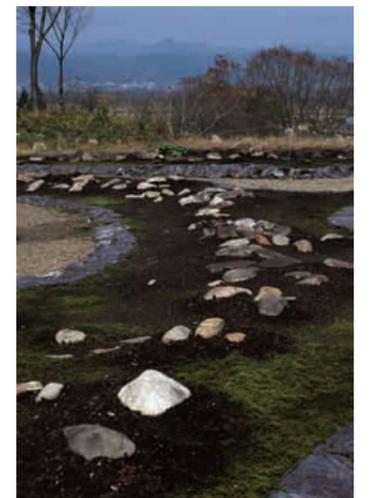
小牧野遺跡のストーンサークル(青森県青森市)

直径は35m、一部四重になっている列石をふくめると55mにもなる。石の数は2,899個。石下に墓のないタイプで、環状列石は祭祀場としての機能が考えられている。



大湯環状列石の野中堂環状列石にある
日時計状組石(秋田県鹿角市)

写真手前が日時計組石で、両脇のやや大きめの石は南北を示す。奥の立石は環状配石墓。万座・野中堂の環状列石は、ともに石下に墓のあるタイプ。万座の石の数は約5,000個、野中堂は約2,000個。



伊勢堂俗遺跡のストーンサークル
(秋田県北秋田市)

A~Dまでの4つの環状列石が確認されている。写真は、A環状列石、直径約32m。Cの環状列石が確認されたとき、道路計画を変更して迂回させることが決定した(1996年)。石下に墓のないタイプ。

て三一〇が続き、そこに直径四がほどの環状配石墓が二基確認できたのである。環状配石墓は当初、マウンドされていたと考えられている。幅員二〇の道路上に立つと、縄文人の目線の高さにこれらの環状配石墓が構築されており、あらかじめ見せることを意図してつくられたと考えられている。

巨大な六本柱建物やこれら一〇を超える幹線道路の存在は、縄文時代の従来の常識を大きくくつがえし、従来の東アジア考古学をも変えたといわれる。

環状列石には、石下に墓があるものと、ないものとの二種類が知られている。大湯環状列石は、配石墓が集まって形成されたものだ。万座と野中堂の二つの環状列石よりなり、二つはほぼ同一の構造で、いずれも一〜二倍規模の配石墓一〇〇基以上が二重の環状となって配置されている。配石の組み方はさまざまで、円形・方

形・楕円形・菱形があり、石の置き方にも、並べたり、立てたり、敷き詰めたりと、八種類に類型化されている。組方の相違は、葬られた人のちがいととも、身分差も表しているのではないかと推察されている。さらにそれぞれの環状列石には日時計状組石が一基ずつつけられている。組石や環状列石の出入口の配石状況から東西南北の方向が認識されていたことがわかり、また二つの環状列石の中心を結ぶと、線上に日時計状組石が位置し、線の示す方向は、夏至の日没の方向であることも判明した。縄文人は長い年月を過ごすうちに夏至を知り、日没の方向を意識して環状列石をつくり始めたと考えられている。また日時計の影や、山と日の出・日没の関係をよみとりながら、四季の移り変わりを知り、木の実などの採取時期を知ったと考えられる。

折りや祭りなどの精神文化に関する縄文人の解明も進み、日本文化の基層との関係も論じられている。

参考文献

- 『発掘！縄文時代―森町の昔―』(森町教育委員会、二〇〇九年)
- 『特別史跡 大湯環状列石ガイドブック』(鹿角市教育委員会、平成二十二年)
- 『大湯ストーンサークル館図録』(大湯ストーンサークル館、平成十八年)
- 『特別史跡 三内丸山遺跡―縄文の至宝―』(東奥日報社、二〇〇六年)
- 小林達雄編著『世界遺産縄文遺跡』(同成社、二〇一〇年など)。